











災害への備え

経験則ではリスクに対応しきれない

九州南部が梅雨入りして二週間がすぎた。十五日には錦江町田代で観測史上二位となる一時間九三

の降水を記録するなど各地で激しい雨が降った。本格的な梅雨を迎え、防災への備えを再点検しておきたい。

気象庁によれば、梅雨前線を押し上げる太平洋高気圧の勢力が弱く、前線が九州の南海上にとどまっていたため、梅雨入りは早年より三日遅かった。

期間中の雨量は五年並みの予想だが油断は禁物だ。南米ペルー沖では海面水温が下がり、異常気象をもたらすおそれがある。

「ラニーニャ現象」が発生している。災害への警戒を怠ることはできない。

二〇〇七年度の防災白書は、この十年間に温暖化などによって集中豪雨が著しく増加するなど、災害リスクが高まっていくことを指摘している。

一九九七年から二〇〇六年の十年間で、「雨の多い年」は「雨の少ない年」よりも一時間五〇。以上の降雨は三百三十二回観測され、その前の十年間の一・六倍に増えた。「恐怖を感じる」といわれる一時間一〇〇。以上の雨は五十二回、二・三回に上った。

県内でも、昨年七月の東北部豪雨は、川内川流域で降り始めからの総雨量が一六五。に達し、三市三町で千三百四十七戸が浸水被害にあった。关ノ瀬川流域でも二二七。が降り、千三百五十戸が浸水した。

るしかない。だが、昨年の東北部豪雨では、薩摩川内市が出した避難勧告に従ったのは一割以下だった。被害の大きかった宮之城地区でも、これまでの災害体験から、雨量や増水のスピードを過小評価して逃げ遅れるケースが目立った。

防災の基本は、早めに避難することだ。足音、気象情報などに十分気を配り、異常を感じたら「まだ大丈夫だ」などと

いう経験則を過信しないことだ。避難勧告にも迷わず従おう。市町村も、避難勧告の発令を早めに出すことが求められている。避難の「に終わっても、住民は「何もなっていない」と勘違いしてはいけない。

自然災害が起る危険性はこれまでになく高まっている。災害への対応力を高めるために、日ごろから避難場所や避難ルートなども確認しておきたい。



社説

この記述の裏面が例外的なものではない